

小布施町立図書館 まちとしょテラソ

正会員 古 谷 誠 章 君
正会員 新 谷 眞 人 君
正会員 高 間 三 郎 君
正会員 八 木 佐千子 君

「栗と北斎のまち」として知られる小布施町に建つ図書館（交流センター）である。現在でこそ、地方都市におけるまちおこし活動は一般的になったが、小布施はその最も早い事例のひとつとして記憶されるのではないか。近年では、町民人口約 1 万人に対して、年間 120 万人もの人びとが訪れる観光都市として、小布施は大きな成功をおさめている。この建築は、こうした著名な観光都市における地域施設という困難な設計条件に対して、ただ本を読むためだけでなく、町民どうしが出会い、思い思いに時を過ごすことのできる「広場」のような図書館として構想されている。

平面をゆがんだ三角形と四角形の融合した形状とすることで、既存の小学校と町役場に挟まれた変形した敷地に、建物を緩やかに差し込むことに成功している。内部空間は、閉架書庫や職員の休憩室など、壁で仕切られた部屋も部分的に含むものの、大きな屋根架構に覆われたほぼワンルームによる構成となっている。幾何学形態を平面に用いながら、内部空間ではこうした図式による空間性は意識されない。むしろ、特別な方向性や軸性を打ち消すかのように書架や什器が配置されることで、緩やかな勾配をもつ天井に覆われた大らかな空間性が前面に現れている。さりげない見えがかりではあるが、天井面全体を覆う木製ルーバーもまた、空間に奥行きと広がり、さらに透明感を与えるうえで大きく貢献している。3次曲面を形成するために、途方もない調整作業の末にこの木製ルーバーによる天井が実現したことは、容易に想像できよう。

自然の造形物を思わせる有機的な形態の屋根は、頂部と端部とで曲率の異なる曲面を三角トラスにより構成し、外周部には水平トラスを廻すことで縁応力を受けるといふ、緻密な構造計画により実現している。このことに加え、上下2段、3本ずつに分かれた方杖をもつ3本の柱が、この大らかな形状の屋根を支持している。建設上の合理性や経済性を優先し、あえて無柱の大空間としない構造計画は、地域住民が日常的に使用する施設という、この建築に求められた役割を考え合わせると納得のいくものである。空調には、大平面を効率よく制御するために、床吹出し方式が採用されている。また、荷重が大きい中央の開架書庫部分をRC床、その周囲を鋼製下地によるチャンバースペースとし、さらにチャンバースペースにおける整流効果を高めるため構造スラブにレベル差をつけるなど、構造と連動した細やかな設備計画がなされている。

このように、観光を主眼としたまちづくりを進める地方都市において、この建築は、住民生活の拠り所となる気の置けない空間を実現しており、意匠、構造・材料、環境・設備といった計画水準が高いレベルで調和した地域施設となっている。設計者らによるこうした粘り強い対応が、地方都市における公共空間の質を向上させるうえで果たした役割は大きいと考える。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。